アメリカ的想像力における自然と都市
『シスター・キャリー』における自然主義的都市イメージの新しさについて(*)

丹治　陽子

Nature and the City in American Imagination: On the Novelty of the Naturalistic Image of the City in *Sister Carrie*

序

本論の目的は、アメリカ的想像力において自然と都市のイメージがどのように表象されているかを歴史的に概観すること、そしてそのうえで、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期の自然主義小説における都市イメージが、アメリカの都市イメージの歴史のなかでどのような独自性をもっているかを、その時期に書かれたセオドア・ドライサー（Theodore Dreiser）の『シスター・キャリー』（*Sister Carrie*）の具体的読解をとおして明らかにすることにある。

＜17世紀と18世紀アメリカにおける自然と都市のイメージ＞

新大陸は1492年にコロンブスにより「発見」された。この発見はヨーロッパの人びとの胸をときめかせたが、それは、それまで詩的幻想としてしか存在しなかった田園（パストラル）というものが、この新大陸という現実となって姿をあらわしたと考えられたからである。当時の人びとにとって新大陸は、「歴史にさらされていない風景」であり、いまだに人間の手垢がまったくついていない自然、「文明の始まる以前の世界の姿を想像させるものを依然として保って」（Marx 31）いる場所、つまり「復楽園」であった。1584年に新大陸へ航海したある船長は、この「復楽園」をつぎのように描写している。

> 陸に近づいたとき、ひじょうに甘く強い香りがただよってきた。あたかもかぐわしい花が咲きほこる妙なる楽園の真ん中にあるかのように感じられた……海の波がうち寄せる岸辺にも、緑の丘にも、他のいかなる地域にも見られないほど豊富に、ぶどうが実っていた。私はヨーロッパでぶどうのよくとれる地というのを訪れたことがあるが、そこ[アメリカ]の様子はほとんど言葉にいい表すことができない。（Barlow 67-69）

このような豊饒の地において、この船長はインディアンに遭遇する。彼によればインディアンは「黄金時代の人びとのようにきわめて柔和で、情が深く、誠実で、狡猾さやよこしまなところは少しもない」（Barlow 73）人びとであり、「素朴で原始的な生活様式の一般的優越性を象徴している」（Marx 37）とレオ・マークスはまとめている。アメリカの初期の植民地の人びとの生活がいかに苦労の多いものであったかを考えるなら、新大陸に「復楽園」をみるという立場は、新大陸という現実に自分たちの夢や理想や願望の世界を投影させた観念的なものであったと言えるだろう。

また、一方で、この「発見」は当時の人びとにとってひじょうに強い宗教的な意味合いをもって

いた。宗教改革の時代にさきがけてアメリカ大陸が発見されたということは、宗教改革によってキリストがこの世に再臨する場所、神の国がうち立てられるべき新しい場所、歴史に汚されていない、これから歴史がつくられる場所が、神の特別な意図によってこのときまで隠されていたのだと考えられたからである。

アメリカの建国の祖といわれるピルグリム・ファーザーズは、イギリス国教会に反対したために迫害を受け、自分たちの考える神の国を築こうと1620年にメイフラワー号に乗ってアメリカに渡ったピューリタンだが、プリマス植民地をつくった彼らの行動は、まさにこのような宗教的情熱に支えられたものだった。

未開の地を実際に切り拓かなければならなかった彼らにたいして、新大陸は自然の厳しい姿をみせつける。荒れ狂う大西洋を2か月航海したあと、コッド岬沖から11月の寒々とした新大陸をながめたウイリアム・ブラッドフォード（のちのプリマス植民地総督）は、その地を「野獣と蛮人の住む、恐ろしい、わびしい荒野」と形容し、そしてつぎのように記している。

> おりしも季節は冬であって、その国の冬を経験したものは、冬はきびしく、はげしいものであり、過酷な恐ろしい嵐になることが多く、知っている場所を旅するのも危険ならば、ましてや、未知の海岸を探索することは、もっと危険なことだということを知っている。その上、野獣と蛮人がいっぱいいる恐ろしい、荒漠たる荒野以外に、一体何を見ることができよう。……どちらへ目をむけたとしても、（天の方へ目を向けるのは別として）目に映るもののなかには、ほとんど何の慰めも満足も見出すことはできなかった。夏が過ぎ去ってしまっていたので、あらゆるものは、風雨にさらされたようすをしており、森と茂みの多い土地全体が野性的で未開の様相を呈していた。うしろをふりかえると、自分たちが渡ってきた巨大な大洋があった。この海は、いまではすべての文明国から彼らを引き離す主な障害であり、深淵であった。(William Bradford 141-142)

新大陸に神の国をうち建てようとした人びとにとって、新大陸の風景は「復楽園」どころか、人に敵意をもって挑みかかってくるような厳しいものだった。しかしこの引用のなかにある「荒野」と「自分たちが渡ってきた巨大な大洋」とは、じつはピューリタンたちの勇気をくじくものではなかった。それは現実に目の前に広がる未開の森や大西洋を指していると同時に、ピューリタンの心のなかでは、聖書に現れる試練の場所としての「荒野」とイスラエルの人びとが渡った「紅海」というイメージに重ね合わせられていたからである。

聖書には、イエスが四十日間「荒野」に滞在し、悪魔の誘惑と戦うというエピソードがあるが、そこでは「荒野」は悪の住処としてあらわされており、そこにキリストが滞在したことの意義は、キリストが神の反逆者である悪魔と戦い、神の真実を実証するための試練を経験したということにある。したがってピューリタンたちは、「荒野」のキリストと「荒野」としての新天地における自分たちの運命を重ね合わせることによって、自分たちはここで神の真実を実証しているというキリスト教徒としての使命感を強く意識したのである。

また、自分たちが渡ってきた大西洋を「紅海」と見立てることによって、自分たちの運命を、エジプトでの奴隷状態を脱出するためにモーゼに率いられて紅海を渡り、カナンの地に王国を築いたイスラエルの人びとの運命と重ね、そのことによって自分たちの未来にも王国が約束されているの

だという希望をもとうとしたのである。さらに、大西洋という大きな水をくぐり抜けることはキリスト教の洗礼と重なるものであったため、彼らはヨーロッパの退廃した文明の世界で生きてきた自分が、大西洋で洗礼を受け（古い自分を捨てる、あるいは古い自分が死ぬ）、新しい人間として再生するという希望を感じていたのである。

以上のように、ピルグリム・ファーザーズの時代のアメリカの自然というのは、「復楽園」と「恐ろしい荒野」という両極端のイメージに分かれていたということができる。しかし「恐ろしい荒野」というイメージにしても、ただ目の前に広がる即物的な風景なのではなく、聖書的な意味あいを付与された空間、そこで神の意志にしたがって人間が努力すれば自分たちの楽園を築くことのできる場所としてのイメージをその背後に隠しもっていたのである。

眼前の荒野的な風景に聖書的な意味を重ねあわせるピューリタンたちの想像力は、17世紀の彼らの日誌、植民地の歴史を記した記録、説教、そして詩などに遺憾なく発揮されている。しかしそのような宗教的情熱は時の経過とともに衰退せざるをえない。とくに18世紀の啓蒙主義の広がりとともに、人びとの想像力はしだいに世俗的になっていく。そのなかで都市と自然ないし田園はどのようなイメージでながめられていくことになるのだろうか。

アメリカが旧世界にむけて独立を宣言し政治的独立をかちえることになった18世紀後半、アメリカにおける都市と田園のイメージを考慮するうえでひじょうに重要なテクストが刊行されることになる。それは、1784年に刊行されたトマス・ジェファソン（Thomas Jefferson）の『ヴァージニア覚書き』（*Notes on the State of Virginia*）である。この著作の趣旨を要約すると、つぎのようになるだろう。

1．ヨーロッパは、その土地に限りがあるため、過剰な人口を養って国家を存立させるためには国民の多くが製造業に頼らざるをえない。
2．しかしアメリカには広大な土地がある。大地で働くものこそ神の選民である。耕作するものの大多数が道徳的に退廃するなどということはありえない。
3．道徳的な退廃は農夫以外の職業に就くものに見られる傾向である。農夫以外のものが全人口に占める割合が、その国の退廃の程度を示すバロメーターである。
4．共和国の幸福や政治の安定性を保つためには、不便さを我慢しても製造業はヨーロッパに任せたい。製造業が発達して生み出される大都市の下層民は、腫れ物が健康を損なうのと同じように、政治の純潔さを汚すものであるからだ。

このようにしてジェファソンは、「大地を耕すものがもっとも徳のある、独立心をもつ市民である」のであり、したがってアメリカはいまだに広大な土地をもっている以上農本主義を維持すべきであり、民主主義社会の基盤を田園生活に置くべきである、そして都市の堕落をけっして国内にもちこんではならないと主張するのである。

このように18世紀後半においてジェファソンは、農本主義にもとづく田園あるいは楽園としてのアメリカというイメージを呈示し、人びとの心を魅了していた。しかし1812年の第二次英米戦争で自国の工業生産を増やさざるをえない立場におかれたアメリカは、以後ジェファソンの期待を裏切って工業化の方向に向かって一挙に進んでいくことになり、その結果、19世紀末には世界一の工業国となっていくのである。そしてそれがアメリカにおける都市の相貌を全面的に変えていくことに

もなっていく。

アメリカ文学の成立とフロンティアの神話

1775年に始まった独立戦争は、83年、アメリカの勝利に終わり、87年の合衆国憲法の制定、89年の初代大統領ワシントンの就任へとつづいていく。しかしその後アメリカは、産業資本主義を基本理念として少数のエリートを中心とする中央集権政府をめざす人びとと、ジェファソンに代表されるような、農本民主主義を基本理念とし、各州に多くの統治権をもたせようとする人びととに分裂し、その分裂が最終的には1861年の南北戦争を引き起こすことになっていく。

ところでアメリカが国家として独立してから、アメリカ独自の文学作品を産み出すようになるまでにはかなりの時間がかかるが、その最大の理由は、ヨーロッパと違って成熟した重厚な社会がないアメリカでは人間どうしの複雑な関係を描く小説が成立しにくかったことにある。しかしその代わりにアメリカでは、社会のなかの人間と人間のあいだの関係ではなく、むしろ自然のなかの人間をえがく小説、そして人間の心のうちの闇を探求する小説が生み出され、それがアメリカ文学のひとつの特徴にもなっていく。

そのような意味でアメリカ的な文学を創造した最初の作家は、ジェイムズ・フェニモア・クーパー（James Fenimore Cooper）と言えるだろう。クーパーは1823年に高貴なる野蛮人ナッティ・バンポー（Natty Bumppo）を主人公とする『開拓者たち』（*The Pioneers*）という小説を書いた。これはアメリカの未開の森林を舞台にした作品で西部劇の元祖ともいえるものだが、クーパーはその後も1841年までにフロンティアを舞台に同じ主人公が活躍する小説を5作書き、これらは主人公ナッティが「皮脚絆」を身につけていたことから、*Leather-Stocking Tales*と呼ばれた。クーパーの重要性は、このレザー・ストッキング・テールズによってアメリカのフロンティア神話の創造に一役買ったことにある。

ここでアメリカのフロンティアについて少し説明を加えよう。ヨーロッパ諸国ではフロンティアという言葉は国境地帯という意味で使われることが多いが、アメリカにおいてはフロンティアとは文明と自然の境界地帯のことである。国勢調査報告書によれば一平方マイルあたり二人以下の地域がこれに相当するが、そのような人口の希薄な地帯を北から南につないものがフロンティア・ラインである。それは線ではなくかなりの広がりをもった地域となるが、それは鉱山や農地を求めて人が西に向かうとともに、当然のことながら西へと進んでいくのである（これは「西漸運動」と呼ばれる）。

このようにひとつの国が歴史の経過とともに拡大してゆくというのは、世界のなかでも珍しい状況であり、それがアメリカの独自性を規定しているというのが、歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナー（Frederick Jackson Turner）のフロンティア理論である。ターナーは「アメリカ史におけるフロンティアの重要性」（"The Significance of the Frontier in American History"）において、アメリカの特徴を「たえず前進を続けるフロンティア線上での原始的な状態への復帰と、その地域における新たな発展」（ターナー、7頁）にあると言い、アメリカ的な性格は「この長年にわたる再生とアメリカ人の生活の流動性、新しい機会をともなう西方への拡張、原初的な社会のもつ単純さとの不断の接触」（同上）に支配されていると述べているのである。

アメリカにおけるフロンティアとは開拓の最前線、つまり文明と自然とが対峙する場所である。現実としての自然あるいは荒野は、文明の汚れとは無縁の無垢なる世界ではあるが、ピルグリム・

ファーザーズのところで述べたように、人間に挑みかかってくるような恐ろしいものである。したがって自然または荒野のなかに入っていった人間は、文明の世界で身につけていた余分なものはすべてはぎとられ、その原初の世界において、真に本質的なものと接触せざるをえない状況に追いこまれる。

ナッティが置かれている状況はまさにこのようなものである。文明社会からやってきた銃の名手ナッティは敬虔なキリスト教徒だが、森のなかで篤い友情によって結ばれたインディアンの友人チンガチグック（Chingachgook）と暮らすうちに、文明と自然の両方の美徳、つまり「森の住人の単純素朴さ、野蛮人の勇壮さ、キリスト教徒の信仰、詩人の感受性」を兼ね備えた「高貴な野蛮人」（Noble Savage）となるのである。

クーパーは、時代が農本主義からジャクソン大統領時代（1829-37）の産業主義へと変わるなかにあって、子どものころに自分が暮らしていたクーパーズタウンでかいま見たフロンティアを懐かしんでこの作品群を書いたといわれている。そのなかで彼が創造したフロンティアの高貴な野蛮人というイメージは、以後現在にいたるまで、アメリカ人の想像力を刺激しつづけてきているが、レオ・マークスはこのイメージのもつ意義を、つぎのように説明している。

> われわれが人間らしくあり続けること、つまり完成された存在たりうることは、社会的人格と自然的（動物的）人格の間を往復する道をたどる場合にのみ可能である。(Marx 70)

つまりフロンティアとはアメリカ人が「人間らしくあり続ける」ためにたえず戻っていかなければならぬ場所、その意味で通過儀礼の場所であるということなのである。

このようなフロンティア神話の例をアメリカ文学のなかに探すと、たとえばマーク・トウェイン（Mark Twain）の『ハックルベリ・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1884)がある。それは、思春期を迎えた浮浪児の主人公ハックが文明社会の束縛から逃げだし、逃亡奴隷のジムと南北戦争前夜のミシシッピー川という大自然のなかを放浪する物語であるが、ハックは大自然のなかで黒人奴隷ジムから愛情や誠実さなどを教えられ、より人間的な存在へと精神的成長をとげる。

そのようにして成長したハックは文明のなかには戻らず、テリトリー・アヘッド（準州）へ向かうと宣言しているが、この彼の決意は、文明に浸食されて後退していくフロンティアとともに移動して荒野に死んだナッティ・バンポーの生き方とともに、フロンティアに向かうアメリカ人の衝動を示唆していると言えるだろう。

フロンティア神話は、現代の作家では、ニック・アダムズという少年の成長を描いたアーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway）の複数の短編小説のなかにも見られる。これらの短編はヘミングウェイの死後の1972年に*The Nick Adams Stories*としてまとめて出版されているが、ここでは文明社会のなかに育ったニックが、ミシガンの自然のなかでの釣りやインディアンとの接触を通じて自然界の厳しい掟を学んだり、文明社会のなかで傷ついた精神を大自然のふところで癒され、新しい人間となった後にふたたび都市へと戻っていくという魅力的な物語が展開される。

同じような物語は、ヘミングウェイの同世代のウィリアム・フォークナー（William Faulkner）の「熊」("The Bear", 1944) でも語られる。これは、荒野の化身のような大熊オールド・ベンを狩るアイク・マッキャスリンという少年の精神的成長の物語で、文明社会から来たアイクが荒野の原初の状態に回帰し、新しい人間として文明社会に戻っていくのである。

『シスター・キャリー』における自然主義的都市イメージ

これまで述べてきたように、フロンティア神話は、文学のなかではクーパーの作品において1830年ごろにはできあがっていたわけだが、現実のフロンティアは1850年の時点で50年前よりも1000マイルも西へ移動していた（ターナーによれば、フロンティアは1890年に消滅することになる）。その一方で、1840年あたりからアメリカは本格的な産業主義社会へと入っていき、南北戦争の終結時点（1865）までにはその傾向は完全に定着する。

それとともに人口の増加、そして都市部への人口移動が顕著な傾向としてあらわれてくる。すなわち、交通革命や商工業の発展、移民の流入や国内の人びとの都市への移住の結果として、都市化の傾向が17、18世紀とは比べものにならない早さで拡大していくことになるのである。

たとえばアメリカの人口が6倍の3140万人になった1800年から1860年までの60年間に、人口2500人以上の町は33個から392個になる。同じく1800年には3個しかなかった人口2万5000人の町は、60年後には35個に増えている（1860年には人口が4万人を越す都市が21個、10万人を越す都市は9個）。都市部に住む人の割合も、同じ時期に9％から35％に増加している。ちなみに、1860年のニューヨーク市の人口は約117万5000人である。

この後も都市への人口集中は20世紀にかけてさらに進み、1870年から1920年のあいだに、アメリカの都市部に住んでいる人びとの総数は990万人から5430万人に急増している。そして都市人口の比率は、1920年に、ついに50％を超えるまでになるのである。

この増加は、農村では夢を実現できないために成功の機会を都市に求めて移住した農民の増加と、同様の夢を求めて海外から押し寄せてきた移民の増加を反映している。とくに1880年以降は東欧と南欧から多数の移民が押し寄せ、第2の移民の波をつくる。1870年から1920年にかけて到着した移民は2600万人にのぼったが、その大部分は都市に定着したと言われている。

都市にこれだけの人びとが集まった直接の原因は、19世紀後半にアメリカがドイツやイギリスを抜いて世界一の工業国になり、都市に労働力の需要が高まったことにあるが、それにともない、1880年代後半から摩天楼が出現しはじめるアメリカの大都市は、機会と成功の夢を人びとに提供する空間、きらびやかな美しさ、お金の魅力、華やかさ、刺激、開放感に溢れる空間と化していく。しかしその一方でそれは、貧困と劣悪な住宅環境（スラム化）と犯罪といった暗黒面によって特徴づけられる空間でもあった。人びとで膨張した都市は機会と貧困とが混在する場所となっていったのである。

そしてこのような都市の姿は、まさにセオドア・ドライサー（Theodore Dreiser）が『シスター・キャリー』（*Sister Carrie*）のなかで描きこんだものだった。

＜新しい現象としての都市＞

『シスター・キャリー』は、1889年夏にウィスコンシンの田舎町から出てきた18才の少女が、シカゴで出会ったふたりの男――ドルーエとハーストウッド――とつぎつぎに同棲しそして別れながら、ニューヨークの劇場でコーラスガールから最後には女優に転身して成功をおさめる物語である。この小説の初版が1900年に発表されたとき、物語の不道徳性が問題になって、出版社が自発的に流通を差し止める手段をとったことは有名なエピソードになっている。ヴィクトリア朝の道徳観から言えば、結婚という手段をとらずに、家庭をもつ男と同棲をするような社会倫理に反する女は、身

をもち崩して堕落と破滅の道をたどり、社会的制裁を受けて死んでいくのが当然であると考えられていたからである。

実際、多くの扇情小説の類がそのような教訓的物語を垂れ流していた状況のなかで、キャリーが罰を受けないばかりか社会的成功をおさめるという物語の展開は、反道徳的であると見なされざるをえなかった。「道徳はあらゆるものに浸透し、あらゆるものの神髄である」(Howells 42) というのは、ドライサーの一世代前のリアリズム作家、ハウエルズの言葉であり、ハウエルズはこのような倫理観に立って、道徳が軸となる世界像を描くことが小説の使命であると考えていたが、このような立場は『シスター・キャリー』初版刊行の年である19世紀最後の年には、まだアメリカの出版界に厳然と残っていたのである。

しかし1907年にこの小説があらためて刊行されたという事実は、おそらくはエミール・ゾラに代表されるフランスの自然主義の影響も相俟って、もはやヴィクトリア朝的道徳観でこの小説を断罪することはできないという現実感覚が生まれていたことを証明しているのではないだろうか（あるいは逆に、そのような現実感覚がフランスの自然主義をアメリカに定着させたということなのだろうか)。ゾラの自然主義はアメリカの作家たちの関心を、大都市の影の部分に暮らす人びとの生活へと向けさせたが、その当時、アメリカの大都市には、それまでには考えられなかった新しい状況が、否定しがたく起きていたのである。

たとえばニューヨーク（マンハッタン）では何が起きていたのか。第一に注目すべきは、人口が1820年から1860年までの40年間に7倍の81万人となっていたことである。この時期、ブルックリンはまだニューヨークに併合されない独立した町だったが、同じく1840年から1860年までの20年間でその人口は7倍以上に増え、26万7000人となり、マンハッタンとブルックリンの人口を合わせると、1860年の時点で100万人を超えていたのである。

そして移民の存在。1880年から1920年までの40年間に、アメリカに上陸した移民約2300万人のうち1700万人以上がニューヨークに上陸し、そのうちの多くがこの大都市に住み着いたという。ユダヤ人移民に関していえば、1880年にニューヨークに住んでいたユダヤ人の人口は約8万人であったが、1881年から1910年までの30年間に、156万2000人がアメリカに殺到し、その大部分がニューヨークに住み着いたという（猿谷、145-146頁、209-212頁)。

このような移民の流入などによる爆発的な人口増とそれが引き起こした社会的文化的混乱は、大都市において、それまで存在することのなかった質的変化と呼ぶべきものを生みだしていたのではないだろうか。それは、「お上品な伝統」を遵守しようとする倫理的社会観を浸食し、ハウエルズの倫理的リアリズムでは描ききれない世界を現出させていたのではないだろうか。

『シスター・キャリー』は、「頭はよいが、内気で、無知と若さゆえの幻想をいっぱい抱えた」(5) 18才のキャロライン・ミーバーが、1889年、列車に数時間揺られて中西部の田舎町からシカゴに出てくるところから始まる。「移民の三世という、アメリカ人としては中位の部類のちょうどよい見本」(6)であるキャリーは、人生の楽しみと快適な暮らしを漠然と夢見てシカゴに向かうのである。このように、特別な目的ももたずにただ夢を求める者たちを、「狡猾な手練手管」(5)でおびきよせ、「無邪気な人の心をなごませ、やがて弱め、そして悪の道へ連れていく」(6) というのが、小説の冒頭において語り手が物語る都市のイメージである。それはいつの時代にも多かれ少なかれ共通する都市のイメージであろう。

> 1889年のシカゴは、前代未聞の成長を遂げている真っ最中で、若い娘たちさえもこのように胸躍る旅に出てやってくるのは、無理もないと思えるような都市だった。稼ぎにありつける可能性にあふれていて、まだまだ発展中だという噂は遠くにまで広がっており、そのために、あらゆるところから希望にみちた人びとや希望を失った人びとを引きつける巨大な磁石になっていた――これから運だめしをしてみなければならない人びとも、すでにどこかで運がつきてみじめな結末を見てしまった人びともやってきた。人口50万を超える都市であり、100万都市にふさわしい野望と派手さと活力を発散していた。(16)

当時、シカゴでは新しい建物がつぎつぎに建てられ、大企業が進出し、巨大な鉄道会社が鉄道運輸の要となるべきこの都市の発展を見こんで広大な土地を入手しつつあった。また、摩天楼を10階建て以上の建物と定義するならば、アメリカで最初の摩天楼が建設されたのも、1884年のシカゴにおいてだった。そしてそのことはシカゴが、すでに人口100万に達していたニューヨークと競い合うようにして成長していたことを示していた。そのような都市として、シカゴの人口は年に5万人の割合で増えていたのである。

そしてその割合で増えつづける人口を吸収する場所を準備しておかなければならない都市は、つぎのような不思議な光景を呈してもいた。

> 路面電車は、人口急増を見越んで遠くの田園地帯にまで延びていた。市は道路や下水道を何マイルも敷設し、場合によっては、孤立した家屋がたった一軒――きたるべき人口稠密地の先駆者といった風情で――立っているだけの地域にまで及んでいた。吹きっさらしの風や雨に打たれるままになっている地域もあり、それでもそこは夜になると、長く列をなしたガス灯の、風に吹かれてちらちら揺れる光がいつまでも点っていた。板敷きの狭い歩道が、遠い距離を隔てて点在する住宅や店舗をつなぐように延びて、それがしまいに途切れるところの先には、大草原が広がっていた。(17)

大草原を侵略しながら急激に拡大していくシカゴの様子は、キャリーがシカゴに近づく車窓から見る風景でもある。「野原に並び立つ電柱に張り渡された電線」は、「さえぎるものもなく広がる平坦な大平原の景色を横切り、大都会に向かい」(11)、都会の夜を煌びやかに演出する明かりを供給し、一日の労働という重荷から解放された庶民が放つ興奮をもりあげている。1879年にエジソンが実用白熱電球の発明をして以来、電気は人びとの生活に浸透し、エレベーターの開発による建物の高層化や、白熱灯に照らされた夜の町の楽しみを可能にしていたが、キャリーもこの大都会の「明かりのついた通りを見つめて、広大な都会の物音や動きや人声に好奇心をかき立てられ」(13)、姉夫婦の住むアパートの戸口に立ち、飽かずに夜の町をながめている。

しかし、都市にはもうひとつの顔がある。職を求めてシカゴのダウンタウンをさまようキャリーが目にするのは独立した立派なビルをもつ商店で、それは当時、他の都市にはまだ見られない風景だった。そしてその傲然とした雰囲気は、「貧困と成功とのあいだに開いた亀裂を深く広いものに見せようとたくらんでいるかのよう」(17) に、キャリーをはねつける。

彼女が歩きながら目にする問屋街、商店街、商工地区、石材会社の巨大な作業場、縦横に走る鉄道の引き込み線、無蓋貨車の列、水路、巨大なクレーン、広大な鉄道操車場、船舶、大工場群。そ

れらは目を奪う光景ではあっても彼女の理解を超える謎の存在であり、それらと何のつながりももてないキャリーを無力感に陥らせる。

このようにしてドライサーは、つぎつぎに押し寄せてくる人びとを受け入れようと待ちかまえているシカゴ郊外の様子から、これまでの人間の理解力をはるかに超える規模のダウンタウンの喧噪や活気までを畳みかけるように描き、都市がそのなかに暮らす人間の感情などまったく意に介さず、嵐のように発展していく猛烈な勢いを、「前代未聞」の現象としてわれわれに伝えている。

そしてドライサーは、自然主義作家に特有の手際で、大都市という歴史上新しい環境のなかに、まるでそれがひとつの実験でもあるかのように、キャリーというひとりの女性を置き、道徳的な判断をとりあえずは保留したまま、その環境における彼女の心理と行動を刻銘に記録していくのである——その新しい環境のなかで暮らす人間の心理と行動もまた新しい現象であることを示唆しながら。

＜消費社会としての都市＞

しかし「城壁をめぐらされた謎」、「よそよそしい迷路」(18) と思えたシカゴも、たとえ週給4ドル半の仕事でも見つかれば、キャリーには「やっぱり愉しい大都会」(28) に早変わりする。職探しの途中に立ち寄ったデパートで目にする「可愛らしい室内履きやストッキング、優美な襞飾りのついたスカートやペチコート、レースにリボンに櫛にハンドバッグ」など、キャリーの欲望をかき立てるものを手に入れるお金が保証されたからである。彼女を幸せにするのは愛情ではなく、消費社会への入門を許すお金なのだ。

消費社会に参入したのもつかの間、キャリーは劣悪な労働条件から病気になり、やっと見つけた靴製造卸会社の仕事も失うことになる。ふたたびキャリーを拒絶する冷淡な都会のなかで、キャリーは懐かしいふるさとへ戻ろうとするのだろうか。姉夫婦は彼女に田舎へ帰ることをすすめる。スエーデン移民の息子で精肉工場の冷蔵庫清掃人としてつましく暮らす義兄は、義妹の下宿代をあてにしていただけであり、失業した義妹を養うことなど考えてはいない。しかもキャリーにとって、ふるさとや父母は郷愁を誘うものでさえない。小説の冒頭でシカゴに向かうキャリーは、別れ際の母の接吻を涙とともに思いだし、日雇いで父が働く製粉工場のそばを通り過ぎるとき一瞬感傷に浸るものの、つぎの瞬間には「少女の頃の思い出と家庭とに、細ぼそとではあれつなぎとめてくれていた絆は断ち切られ」(5) て、二度と復活しないのである。

そのような貧しい家族の絆などより、流行の服装や劇場、レストランなど消費の欲望をかき立てる都会の魅力は、はるかに強い。デパートにあふれる商品を見て、「心の底から、着飾ってきれいになりたいと思っていた」(23) キャリーが必要とするのは、消費にたいする彼女の欲望を満たしてくれる人である。そして彼女が女優として成功するまでは、その役割は、ドルーエとハーストウッドというふたりの男が果たすことになる。

たとえばドルーエは、「当時の俗語で『ドラマー』とよばれはじめていた階級」(製造会社に雇われた販売促進外交員)、「さらに新しい言葉で『マッシャー』とよばれる部類」の典型として紹介されている。「マッシャー」は、1880年にはアメリカ人のあいだで広く使われていた言葉で、「身なりや作法に工夫を凝らし、若く感じやすい女性の歓心を買おうとするような伊達男」(7) という意味である。流行の立派な服に身をかためたこの手の男たちは、「女性に対する激しい欲望にうずく、きわめて好色な性質」から若い女性に厚かましく近づく、「移ろいやすい快楽への飽くなき執着に動か

される心の持ち主」(8) である。

消費社会の申し子ともいえる軽佻浮薄なドルーエだが、素朴なキャリーの目には彼が豊かな世界の「中心を占めているように見え」(10)、彼が失業中のキャリーに援助を申し出ると、キャリーは彼と人情という絆で結びつけられたという気持ちになる。人を結びつけるのは愛情ではなく、お金なのだ。ふたたび消費社会に参入する力を与えられたキャリーは、ほしくてたまらなかったジャケットなどの商品を買い、部屋を借り、劇場やレストランで「心を麻痺させるような大都会の影響力」(72) を享受し、都会の消費社会への扉を開けてくれたドルーエの心優しさと気性の良さに惹かれて、彼と暮らしはじめるのである。

しかし、消費への欲望充足のための同棲はキャリーに満足感を与えることはない。

> キャリーは、富の流儀――富がまとう皮相の姿――についての敏感な研究者だった。ある品物を見るとすぐに、それをうまくものにできたら自分はどう見えるようになるかと考えはじめる。言うまでもなくこれは、高尚な反応ではないし、分別のあることではない。立派な精神をもっている人たちは、こんなことで心を動かされはしないのだ。だが反対に、きわめて低級な精神の持ち主も、こんなことで心を動かされはしないのだ。キャリーにとってきれいな衣服は、したたかな説得力をもっている。衣服は甘い言葉で、またイエズス会士のような詭弁を弄して、自己主張する。その訴える言葉が耳に届くところに足を踏み入れると、内なる欲望がその言葉に聞き入る。無生物と呼ばれるものの声！　石の語る言語をわれわれにもわかるように翻訳してくれる人などはどこにいようか。(88)

衣服はキャリーにとっても、「マッシャー」であるドルーエにとっても「したたかな説得力」をもっている。キャリーは、良心に命じられれば、飢えにもつらい仕事にも苦労の日々にも打ち勝てるかもしれないが、「自分の容姿を台無しにするの？――古びた服を着て貧しい身なりに甘んじなければならないの？――まっぴらごめんよ！」(89) と、ファッションへの執着をあらわにしている。このように品物、商品が説得力ある言葉をもち、人間の欲望に語りかけてくる時代、消費の時代のなかでの人間関係は、つぎつぎに経済行為によって結ばれ、突き動かされ、お金がすべてを解決できるのではないかという感情をさえつくりだす。豪邸が建ち並ぶ地区をドライブしたキャリーは、「ここには愁いもなければ、欲望が満たされぬままに終わることもないのだろう」「ここにこそ幸せがある」(101) と信じて疑わず、悲しみも心痛もお金が終わらせてくれるのだろうと想像するのである。

必要に応じて商品が買われるのではなく、必要とは無関係に欲望がかき立てられ、商品の使用価値ではなく交換価値が異常に拡大されてしまった消費社会。キャリーがシカゴのなかで巻きこまれていたのは、まさにそのような社会であった。

その後、キャリーはシカゴを離れ、酒場の雇われ支配人ハーストウッドとニューヨークへ出奔することになるが、人口100万の大都市ニューヨークに着いたとき、それぞれ20才と40才になろうとしていたキャリーとハーストウッドは、この町を違ったふうに体験することになっていく。

人口50万程度のシカゴでは、安定した地位についてさえいれば一目置かれる余地があったが、ニューヨークの上流の有力者が見せつける壮麗さはそれとは比較できないほどのものである。ハーストウッドは、自分がこの世の中でいちばん重んじていた富、地位、名声がすべて集中しているこの

都会の恐ろしさを知っている。10万ドルから50万ドルぐらいの収入があっても、人並み以上の生活を送る特権を手に入れることなどできないこの町で、1300ドルを元手にどう暮らしていくかを考えるのが精いっぱいなのだ。

そして、ニューヨークでのハーストウッドの運命は、手元のお金のカウントダウンに合わせて下降していく。失業し、キャリーに捨てられ、路上生活者となり物乞いをし、慈善に頼り、ついには自ら命を絶つ。ニューヨークでのハーストウッドの生活は、きらびやかな消費社会のもうひとつの顔、おそらく当時アメリカに渡ってきてニューヨークの下町を埋め尽くしていた移民たちの悲惨な生活に重ねられているのだろう。

しかし、人生に踏み出したばかりで、富と享楽の世界を目にしたキャリーは、「見果てぬ夢」を、あきらめずに追うことになる。「甘やかされておしゃれに手間をかけている女の気配を全身から発散」し、「いかにも深く愛され、あらゆる願いが叶えられていると言う風情」(258)のヴァンス夫人、ソースタイン・ヴェブレンの「顕示的消費」を体現するような有閑夫人と友達になったキャリーは、彼女に誘われてブロードウェイを歩く。

マチネの前後にこの通りを歩く着飾った男女の群れを初めて見たキャリーはその虚飾の世界に圧倒され、彼らと対等な身なりができるまで二度と来るまいとまで思う。また、ブロードウェイの芝居の世界に魅せられた彼女は「この都市は、快楽と愉悦が渦巻く一個の運動体」であり、自分はまだその全貌を見ていないことに気づく。そして、この街にあふれる贅沢や道楽を「少しでも生活に取り入れられるまでは、生きていなかったことになるし、生きていたなどと言えるはずもない」(262) と思う。ニューヨークは富と奢侈のかぎりをキャリーに見せつけてその憧れを誘い出す一方で、今のつましい生活という現実を直視させ、夢にたどり着けずにいる不幸を強烈に意識させる。

だが、夢や幸福に近づくには何が必要なのだろうか。

＜自然主義的都市のイメージ＞

失業したハーストウッドが職探しさえしなくなると、キャリーは彼から離れ、コーラスガールから女優への階段を一歩ずつ登りはじめる。そして当たり役を得て週給150ドルを手にしたキャリーは考える。

> お望みのものは愛だということになれば、お金ができたところで何の役にも立たないことは、すぐに明らかになる。150ドルを手にしても、別に何をすればいいのか思いつかなかった。(380)

この小説には愛にたいする渇望は見られない。渇望はつねに、消費への欲望を満足させてくれるお金に向けられている。キャリーには、結婚という制度に守られた生活への渇望はある。しかしこの小説のなかの女たちは、経済的な支えを得て美しく着飾ること、体面のよい生活をすることを目的とし、男たちに精神的なものを要求しない。一方、男たちは美しい女を手に入れて享楽的な生活を続けることには熱心だが、結婚して得た家庭のなかでの人間的な関係を女から拒絶され、自分からも要求しようとはしていない。また、キャリーに近づいてくる人たちとの間にも、「心の通い合う、暖かみのある友情などはない」(368) のであり、集まって浮かれ騒いでいても、みんな自分の楽しみを求めているだけなのだ。

いまの暮らしを維持して行くには、ほんとうに意外なことだが、そんなお金は必要がないように思えてきた。もう少し上等な暮らしをしたいとか、上流の仲間入りをしたいとか望むならば、これでは足りない――はるかにもっと多くのお金が必要となる（380）

シカゴで暮らしていたとき、お金があれば悲しみも愁いもなくなるだろうと考えていたキャリーは、ここへきて、経済的な欲望には上限がないことを実感する。欲望はいったん必要から乖離してしまえば、あとは無際限に拡大していかざるをえないからである。結局、ドライサーにとって、消費社会化した都市とは、そこに住む人間たちが無際限の欲望に駆られて道徳性を失い、本能に駆られて行動する動物へと先祖がえりする場所にほかならない。

スペンサーをはじめとする現代の自然主義哲学者たちは、自由主義的なことをいろいろ言っているけれども、人間は道徳に関しては幼稚な感覚しかもっていない。この方面には、進化の法則に従うだけではすまない側面がある。……このような事実の本質のなかにこそ、道徳の第一原理がひそんでいるのだ。(81)

人間は道徳に関しては「進化の法則に従うだけではすまない側面がある」のであり、それこそが「道徳の第一原理」だと語り手をとおして述べているドライサーは、人間は道徳的には完全に人間に進化しきってはいないと述べているのであり、人間をなかば動物としてながめ、都市のなかの人間の状況をジャングルのなかの動物のそれと比較さえしているのである。

宇宙にあまねく駆けめぐり戯れる諸力のただ中にあっては、素朴な人間は、風にもてあそばれる一握りの藁束にすぎない。現代の文明はまだ中間段階にある。もはや完全に本能によって導かれていないという点において動物的ともいえないかわり、まだ完全に理性によって導かれていないという点において人間的とも言えないからだ。……人間はと見れば、ジャングルという隠れ家からはるかに隔てられ、生来の本能は自由意志にあまりにも近づきすぎたために鈍くなり、その自由意志は、本能に取って代わって完璧な指針を与えてくれるほど十分には発達していない。あまりにも知能があるために、本能や欲望だけに従うことはできないし、まだ意志薄弱なので、いつも本能や欲望にうち勝つことができるとは限らない。動物としての人間は、生命の力に導かれ、本能や欲望に助けられるが、人間としては、そういう力と完全に手を結べるようにはなっていない。このような中間的な段階で、人間はよろめいている。本能に従って自然と調和を保ってもいなければ、思慮深く自由意志と歩調を合わせていくこともまだできない。風にもてあそばれる一握りの藁ともかわらず、情念のままに左右され、あるときは意志に従って行動し、またあるときは本能に動かされる。一方に従って誤りを犯したかと思うと、他方によって取り返し、一方によって倒れては、他方を頼りに起きあがる。無量の変化に富む生き物である。われわれにとっての慰めは、進化の法則はたえず働いているし、理想は裏切るはずのない導きの光であるとわかっていることである。人間はいつまでもこんなふうに、善と悪の間で宙ぶらりんのままになってはいない。自由意志と本能とのこの衝突がおさまり、人間が完璧な知力に達し、意志が本能に完全に取って代わる力を与えられたときには、もうふらつかなくなる。いつか知力の磁針が、真理という彼方の極北を揺るぎなく指し示すようになる。(67-68)

人間を「動物としての人間」として、なによりも動物との類比においてながめるまなざしは、『マクティーグ』(*McTeague*) のフランク・ノリス (Frank Norris)、『ジャングル』(*The Jungle*) のアプトン・シンクレア (Upton Sinclair) とも共通するものとして、ドライサーが紛れもなく自然主義作家であることの端的な証であると言えるだろう。それは自然主義的なまなざしなのだ。

こうして都市は、人間を動物としてながめる自然主義的なまなざしのなかで、自然——そのなかで闘争と進化が進行しつつある——と重なってくる。人間が動物であるように、都市は自然なのである。そこにおいてアメリカ的想像力を長いあいだ支配しつづけてきた自然と都市の二項対立は解消することになるだろう。消費への欲望のなかで道徳を失った都市は自然と対立する場所ではなく、動物にとってのジャングル同様、「動物としての人間」が「本能や欲望」と「自由意志」とのあいだで翻弄されながら生存可能性を追求していく自然にほかならない。

都市が自然にほかならない——この自然主義的認識はアメリカ的想像力にとってまったく新しい境地だったのである。

* 本論文は、平成 13度から16年度にかけての科学研究費基盤研究 (B)「19世紀末英米文学における都市の表象に関する新歴史主義的研究」(研究代表者　シーラ・ホーンズ) の研究成果「アメリカ的想像力における都市」を大幅に書き直したものである。この共同研究をとおしていろいろな示唆をあたえてくれた他のメンバーに感謝を申しあげたい。

引用文献

Arthur Barlow, "The First Voyage to the Coasts of America", *Norton Anthology of American Literature, Fourth Edition,* vol. 1, ed. Nina Baym, et. al. (W. W. Norton, 1994), pp. 68–76

William Bradford, *Of Plymouth Plantation*, cited in *Norton Anthology of American Literature, Fourth Edition,* vol. 1, ed. Nina Baym, et. al. (W. W. Norton, 1994), pp. 130–160

Theodore Dreiser, *Sister Carrie* (Houghton Mifflin Compny, 1959)

W. D. Howells, *Criticism and Fiction and Other Essays*, eds., Clara M Kirk and Rudolf Kirk (New York UP, 1959)

Leo Marx, *The Machine in the Garden* (OUP, 1964)

猿谷要『世界の都市の物語２　ニューヨーク』(文藝春秋、1992年)

Ｆ．Ｊ．ターナー『アメリカ史における辺境』松本政治・嶋忠正訳 (北星堂書店、1973年)